シリーズ　ラジオ90年　【第3回】

拡がるラジオの「同時性」空間

～放送による帝都への集権化～

東京大学大学院情報学環 特任助教　松山秀明

放送開始から90年，さまざまな時代にラジオ放送が見せた多彩な表情を取り上げていく「ラジオ90年」シリーズ。第3回は，ラジオ･メディアが創りだす「同時性」空間の変遷について考察する。とくに天皇の在所である帝都･東京との関わりに注目し，ラジオによる「同時性」空間の誕生とその発展の過程を明らかにする。

1925年に設立された日本初の放送局「東京放送局」は，愛宕山を中心点として，まず東京近郊に聴取範囲を拡げていった。その後，既設の三放送局を統一して誕生した「日本放送協会」は，1928年の昭和天皇の即位行事に合わせて全国中継網の敷設を行ない，ラジオの「同時性」空間を東京から全国へと拡げていく。ここにおいて帝都・東京を基準に時間を秒単位で共有する空間体験が始まった。さらに，紀元2600年の奉祝とした1940年の東京オリンピック大会は，帝都を中心とした放送による「同時性」空間の到達点として目指された。

しかし，ラジオはオリンピックという祭典よりも，戦争と同期していくことになる。廃墟化した東京から玉音放送が流れ，初めて正式に天皇の声がラジオから流れたとき，戦前の「同時性」空間は完成とその終焉を見たのである。以上，本稿で辿られる戦前のラジオの「同時性」空間の変遷は，放送によって集権化されていく帝都の姿でもあった。

1．はじめに――本稿の目的

1925年に放送を開始した日本のラジオは，人びとにまったく新しい体験をもたらした。たとえ離れた地点にいようとも，放送を介し，人びとは同じ情報を瞬時に共有することができるようになった。ラジオによる「同時性」空間の誕生である。これは同一の放送を複数の地点にいる人びとが聴くことができるようになった（同時聴取性）だけでなく，ある場所で起こった出来事を即時的に体験できるようになった（同時体験性）ことも意味していた。1920年代，電波という目に見えない物体が，時空間を超えて人びとの経験をつなぎはじめたのである。

本稿は，シリーズ「ラジオ90年」の3回目として，このラジオの媒体特性に着目し，全国へと拡がっていった「同時性」空間の変遷を明らかにするものである。とくに放送を開始した1925年から，敗戦を迎える1945年までの期間における日本のラジオの「同時性」空間の誕生の経緯と，その発展の過程を記述していくことにしたい。

そもそも，このラジオのもつ「同時性」という特徴は，新聞に勝る媒体特性として，当初から論じられてきたことである。例えば『ラヂオ年鑑』には，創刊時から「ラヂオの特質は時間空間を超越したる電波伝播の瞬速性と普遍性に存する」[1)]と明記され，「ラヂオの有する広範なる同時的伝播力，深刻なる同時的徹底力は寔（まこと）にラヂオ特有のものであって，他の何物

も之に企及することができない」[2]と記載されている。

また，ラジオ研究においても繰り返し指摘され，例えば加藤秀俊はラジオが本格化した1930年代に「通信」が「交通」から分離し，日本列島が一瞬にして同一の情報で塗りつぶされるようになったとラジオの「同時性」の誕生を論じ[3]，同様に藤竹暁も，放送の発達は事件の生起を，事件の展開に即して同時に把握することを可能にしたと論じた[4]。また，竹山昭子はこれらの議論を進め，ラジオを「時間のメディア」として，いままで曖昧だった人びとの時間感覚が「時刻」という同時的な行動基準へと変容したことを論じ[5]，さらに海外に目を転じてみても，マーシャル・マクルーハンが論じた電子文化による「部族的な共感覚」の復権は，放送による「同時性」空間の誕生に依拠して論じられたものであったと言うことができよう[6]。

このように見てみると，ラジオが創りだす「同時性」空間はもはや言い尽くされた感が否めない。そのなかで本稿が改めてこれを取り上げようとするのは，上記の問題意識がどこか抽象的な議論のまま終わってしまっている物足りなさがあるからである。たしかに巨視的なメディア文化史のなかで，ラジオの「同時性」空間の誕生を論じることの一定の有効性は否定しないが，それ以上に，日本の放送について考えていく場合，この「同時性」空間が日本の風土のなかでいかにして拡がっていったのかという日本固有の放送の発達過程を加味しつつ，論じていかなければならないと思うのだ。

さらに日本の放送の場合，当初から「商業放送局」としての役割を期待されて発達したアメリカのラジオ局とは本質的に異なり，その始まりが営利を目的としない「社団法人」であったことは看過できない事実である。かつて長谷川如是閑が的確に論じたように，日本の放送とはその初期段階から，極めて「中央集権的」であった[7]。ゆえに，時の為政者たちが近代日本を一つの国家としてまとめあげようとする際に，新しく生まれた放送の媒体特性をいかに利用しようとしたかという極めてドメスティックな放送史を辿りながら，日本におけるラジオの「同時性」空間の拡がりについて考察していく必要があるのである。

その際，本稿で補助線として問うていきたいのは以下である。第一に，「同時性」がつくる円弧には必ず中心点があるはずで，その中心が東京であったという事実である。ラジオによって創られる「同時性」空間が拡大すればするほど，中心となる舞台が顕在化され，日本の場合，それが首都・東京であった。

第二に，東京を考えるうえで欠かせないのが，天皇の存在である。明治時代以降，その宮処（みやどころ）を東京に置く天皇は，後述するように，国家的な儀礼などの祭祀において放送空間の拡大に決定的な影響を及ぼしていった。この東京と天皇，すなわち〈帝都〉を中心に結ばれていく共時性の網の目こそが，日本固有のラジオの「同時性」空間の拡がりを考えるうえで重要となる視点なのではないか。

したがって，本稿の目的を改めて示せば，本稿は，天皇の在所である帝都との関わりのなかで，ラジオの「同時性」空間の変遷を明らかにするものである。そのために以下，各放送史の記述や論者たちによるラジオ論を参考にしつつ，その過程を論じていくことにしたい[8]。そこで，まず，日本の放送が開始する直前に起こった関東大震災（1923年）から話を始めることにしよう。

2．放送空間としての東京

(1) 後藤新平の思想――帝都の近代化

1923年9月1日午前11時58分。多くの家庭で昼食の膳に向かおうとしていたであろうとき，東京市をマグニチュード7.9の大地震が襲った。震源地は東京から約80キロメートル離れた相模湾北西部であった。関東大震災である。死者・行方不明者は10万人を超え，震災時の東京市の世帯数48万3,000戸に対し，この地震による全焼は31万1,962戸にのぼった[9]。焼失地区は木造家屋が密集する下町付近に集中し，名所だった浅草の凌雲閣（12階）は8階から上の部分が崩落。東京から多くの人びとが離れ，一時は東京遷都論まで囁かれた。

この1920年代初頭の未曾有の大災害の発生が，日本における放送局設立の機運を高めたことは間違いない。「この大震災は一面に於て却ってラヂオの実施機運を促進する結果ともなった」[10]のである。

なぜラジオへの機運が高まりを見せたのかというと，第一に，大震災の惨禍をいち早く伝えることができる無線放送への必要性が再認識されたこと，第二に，震災の混乱のなかで起こった流言蜚語に対する悔恨があった。戦後，長岡半太郎も関東大震災前に放送がなかったことを悔しがり，「流言蜚語四隣に湧き，真偽を確かめる途は絶えて，帝都の状況を知るに苦んだ。もし放送が此時既に開けていたならば，波の便りに，都の混乱を察するを得べし」と述べている[11]。

この関東大震災から一年半後の1925年3月22日，日本におけるラジオ放送は仮放送をきっかけに誕生する。当時の逓信大臣犬養毅による発案で，放送事業体は営利を目的としないことが約束され，まず「社団法人東京放送局」が開局した。最初は放送設備も整わず，同年7月まで，芝区新芝町の府立東京高等工芸学校の一部を間借りして放送が行なわれた。

このとき東京放送局の総裁を務めたのが，後藤新平である。後藤は震災の翌日に内務大臣として入閣し，帝都復興院の総裁に就任すると，(1) 遷都の否定，(2) 復興費30億円，(3) 欧米の最新の都市計画の適用，などを掲げた[12]。当時の国家予算を大幅に超えるその都市計画は「大風呂敷」と揶揄されるほど大胆に，帝都復興へ舵をきっていく。

日本で最初の放送局の総裁と，帝都復興院の総裁が同一人物であったことは見逃せない。それはラジオというメディアの誕生が，帝都の復興計画と密接に関係していることを示唆しているからである。日本におけるラジオの誕生は，一人の為政者を通じて，帝都復興事業との連続性のなかに位置づけられるのだ。

総裁就任の挨拶をする後藤新平

ラジオ放送が開始した1925年3月22日午前10時，後藤新平は東京放送局の総裁として，「無線放送に対する予が抱負」と題する演説を行なっている。「諸君，いよいよ本日より無線電話の放送を開始するに際しまして，不肖後藤新平が当放送局の総裁として，茲（ここ）に一言する

の機会を得たことは，最も光栄とする所であります」と始め，それを読む後藤の様は「そり身の演説」[13]であったという。

多くの放送史が必ず言及するように，後藤はこの挨拶のなかで，これからの放送事業に関する4つの職能を挙げている。第一に「文化の機会均等」，第二に「家庭生活の革新」，第三に「教育の社会化」，第四に「経済機能の敏活」である。なかでも後藤の思想を理解するために重要なのは第一の「文化の機会均等」で，後藤は次のように述べている。

「第一は文化の機会均等であります。従来各種の報道機関や娯楽慰安の設備は，都会と地方とに多大の懸隔がありました。御主人は外に於て諸種の文化的利益を享けつつある間に，家にある者は文明の落伍者たる場合がありました。或る階級の者が受くる便益を他の階級の者が受けざる場合も亦無きにしもあらず。然るに我がラジオは，都鄙（とひ）と老幼男女と各階級相互との障壁区別を撤して，恰（あたか）も空気と光線との如く，あらゆる物に向って其の電波の恩を均等に且つ普遍的に提供するものであります」[14]

この後藤のラジオ観，すなわち，ラジオによる都鄙（都市と地方）や階級の撤廃を謳うその姿勢は，明らかに後藤がすでにもっていた近代都市への理念と相通じるものがある。欧米にならって計画された帝都復興事業は，結局，八分の一程度に規模が縮小されてしまう。しかし，「昭和通り」として実現した道路体系の敷設など，機会均等や経済の活性を目指した近代都市の街づくりは，そのまま新しく始まったラジオというメディアへと受け継がれていく。後藤は帝都復興という一大事業のさなか，都市か農村かに関係なく階級も選ばずに伝搬し，経済を敏活化するラジオというニュー・メディアに，近代都市の構想を重ね合わせたのであった。

ただし，ここで注意したいのは，このとき後藤は演説のなかでラジオの最大の特性である「同時性」や「速報性」について一切触れていないことである。これは竹山昭子が論じたように，設立の出資者でもあった新聞社への「配慮」があったためである[15]。当時，主流のメディアであった新聞業界は，報道は新聞のものだという自負があり，「同時性」や「速報性」というラジオの優位性を牽制し，睨みをきかせていたのである。したがって東京放送局の設立当初は，まだラジオの「同時性」が表立って語られることは稀であった。

(2) 愛宕山という中心点

1925年3月の東京放送局の開局を皮切りに，6月1日に大阪放送局，7月15日に名古屋放送局が次々に開局した。当初はこれら三局の間に経営的なつながりはなく，それぞれが単独経営体として併存している状態であった。ゆえに，それぞれの放送局は独立した電波の円弧を各都市に拡げ，局所的な「同時性」空間を展開していた。

そのなかで東京放送局は，先行する放送事業体として，独自の準備に入っていた。放送局舎の新設である。先に述べたように，設立当初の東京放送局は高等学校の一部を間借りして仮放送をしていたのだが，来るべき本放送に向けて新局舎建設の予定地をすでに決めていた。その場所が，芝区愛宕山公園一号地（愛宕山）であった。愛宕山のほかにも，代官山，上野公園見晴，下渋谷高地，本郷帝国大学用地などが候補地として検討されていたが，愛宕山は障害物も少なく，「理想的放送地」とされた[16]。

ラジオが始まった大正末期から昭和初期，

首都・東京の中心地はまぎれもなく銀座であった。「銀座・銀座・銀座，夜の銀座，昼の銀座，男も銀座，女も銀座，銀座は日本だ」という安藤更生の一節[17]を引くまでもなく，当時の銀座では洋装のモボとモガが街を闊歩し，歓楽文化を謳歌していた。しかし，東京におけるラジオの「同時性」空間の中心点は，銀座ではなく，愛宕山であった。

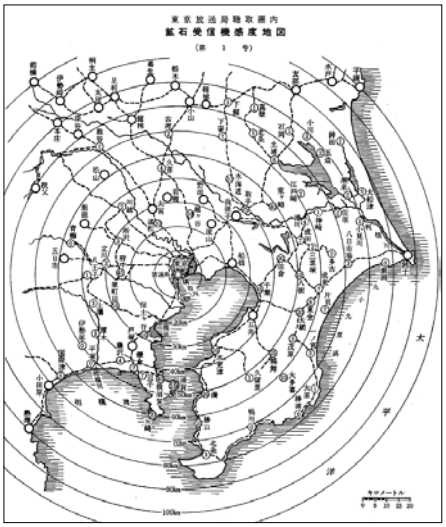
愛宕山に東京放送局の本放送施設が完成したのは1925年6月15日で，本放送が開始されたのは7月12日のことである。愛宕山の樹林のなかにクリーム色の近代的な局舎が建設され，その両翼には高さ45メートルの鉄塔（アンテナ塔）が設置された。当時の新聞はこの鉄塔を「愛宕山の一大鉄塔」と称した[18]。

愛宕山の鉄塔

今和次郎（こんわじろう）らが刊行した『新版東京案内』（1929）では，この塔のことを次のように述べている。「建物は，鉄筋コンクリートの二階建，形のよい明るさで，愛宕山のてっぺんに高い鉄塔のもと，夕陽に映えるところなど，たしかに現代的東京風景である」[19]。東京を練り歩く今和次郎たち考現学グループにとって，この放送塔は遠くに映る摩天楼のようであったのだろう。「愛宕山に天を摩する鉄柱を見上げて，あれが『声の素』かとうなづくのである」[20]。

これは震災で凌雲閣が失われた後，東京の都市空間に新しく生まれた「垂直軸」であった。遠くまで電波を届かせようと高く聳え立つ放送塔は，意図せずして，それ自体が東京の景観を変える復興のランドマークとなっていった。この放送による「垂直軸」は，戦後，東京タワー（日本電波塔）へと引き継がれ，設計者が同じ内藤多仲であったことは歴史の必然であったと言うほかはない。

なお，1926年4月から7月にかけて，この愛宕山を中心点として，鉱石式受信機で聴きとれる地域とそこでの感度数に関する実地調査が行なわれている[21]。



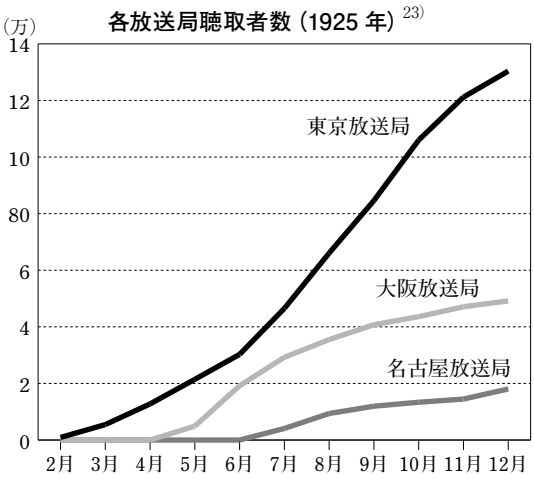
鉱石式受信機感度地図（1926 年）

この地図によれば，東京放送局の新局舎から簡単な放送言語を了解し得る程度に聴きとれた範囲は，熊谷（埼玉県）や大原（千葉県）まで60～70キロメートル圏に及んでいた。山間部の関東西部より，平野部の東部のほうが，無論，感度は高い。こうして愛宕山を中心として拡がるラジオの「同時性」空間が，東京近郊の都市空間のなかに完成しようとしていたのである[22]。

3．東京から全国放送網の敷設へ

(1) 東京放送局の画策と日本放送協会の誕生

東京放送局の誕生によって東京近郊が電波で覆われようとしていた。この東京放送局の次なる目標が，聴取範囲を東京からさらに拡げ，全国へと向かっていくことは想像に難くない。東京放送局は，東京を中心とする「同時性」空間を今度は全土へと拡大することを画策していくことになるのである。実際，東京放送局は開局以来，聴取者数を伸ばし，1925年末には約13万人に達するなど，その規模において他局と比較しても一人勝ちの構図を築きつつあった。



それゆえに東京放送局は，「其の與えられし放送区域即関東八州にのみ止まらず，文化を全国に均霑（きんてん）せしめんことを冀（こいねが）ひ，其方法として地方に数箇所の中継放送所を設置し，無線若は有線による中継設備を以て，東京と連絡を計り，以て豊富なる中央の放送資料を供給するの計画を樹立した」[24]のである。

この「計画」とは，大正14（1925）年11月13日付けで逓信大臣に提出された「全国放送網に関し当局に稟請せし東京放送局の二案」である。二案のうち一つ目が「地方中継放送所設置に関する稟請」で，東京放送局の放送を地方に聴取させるため中継放送所を設けようとするものであり，二つ目が「東京中央大電力放送所設置案」で，東京放送局の出力電力を増大させようとするものであった。

すなわち，これらは東京放送局の規模拡大のために，①地方に中継局を設けるか，②中央放送局の出力を上げて巨大化するか，という二者択一の申請であった。いずれにしても，この二案は，東京放送局の聴取範囲を単独で全国へと拡げることを狙った自主的な計画案であった。こうして東京放送局は放送による帝都の集権化計画を，極めて明確な形で打ちだしていくことになったのである。

しかし，東京放送局によるこの計画は実現することはなかった。それは逓信省が新しく「新社団法人組織案」を提出することになったからである。犬養毅に代わって逓信大臣に就任した安達謙蔵はこの組織案の強い推進者であったが，安達によれば，東京・大阪・名古屋の三放送局を地方的な施設に限定しておくことはラジオの価値を損ねており，ラジオを全国に普及させるためには三局を合併して「新社団法人」を設け，全国どこにいても鉱石式受信機で放送を聴けるようにしなければならないという[25]。周知のように，この三放送局の統一合同構想こそが，1926年8月20日の「社団法人日本放送協会」の設立へとつながっていくことになる。

この三局合同構想は，先に東京放送局が稟請した案とはまったく別の，逓信省から出された計画であった。ただ，東京放送局からすればすでに独自に全国放送計画を立てていたという自負があり，もし逓信省から合同組織案が出されたとしても，東京を中心に物事を有利に動

かそうとする下心があったことは否定できない。そもそも，東京放送局による計画の内容は，「相当杜撰なものであり，企画の動機は必ずしも計画の実現を期そうという確固としたものでなく，何等かの機会に合同が可能となった場合，先願者として有利な優先的地位を得る下構えもあった」[26]とみるのが妥当であろう。

したがって，東京放送局もこの逓信省による合同案に一応の反対のポーズは見せたものの，基本的に反対をする理由はなかった。一方，これに強い反対の動きを見せたのが大阪放送局で，大阪は東京と合併するよりも，新しく株式会社として民営化すること，さらに東京と大阪の「二大中心主義」を主張した[27]。

大阪放送局は対案を示して強く反発しつづけたが，逓信省による上意下達の政策に巻きこまれ，結局，東京放送局，大阪放送局，名古屋放送局の三局が統一し，1926年8月20日，「社団法人日本放送協会」が誕生した。

当初より東京放送局が全国放送に向けて早い動きを見せていたこと，そして逓信省による中央集権的な強制力が，放送による東京一極集中の基盤を作りあげることになっていったのである。

(2) 大正天皇崩御――天皇の哀音

新しく誕生した日本放送協会は，五年以内に鉱石式受信機で全国どこでも聴けるようにすることを目標とした。そのために，既設局の電力を増大し，さらに地方都市に放送局を新設する「施設計画案」が計画された。かつての三都市による地方的経営から，全国的な独占経営へと移行しはじめたのである。そのなかで日本放送協会内の東京中央放送局は，「新社団法人組織案」[28]において「本部を東京市に置き，全般の事業及会計竝（ならび）に主要事項を統理すること」と規定され，全国組織の中央としての役割を期待されていた。

こうした放送の全国一元化と，それに伴なう東京への集権化の動きのなかで，決定的に重要であったのが，天皇である。多くの放送史が記述するように，新しく誕生した日本放送協会がまず直面しなければならなかったのが，刻々と移りゆく大正天皇の病状を伝えることであった。もともと病弱であった大正天皇は葉山の御用邸で療養中であったが，1926年11月以降，その病状は悪化し，予断を許さない状況になっていた。

日々，国民の天皇への関心が高まるなかで，新しく誕生した日本放送協会は刻一刻と変化する大正天皇の御容態を，宮内省からの連絡を受けて逐次伝えつづけた。『調査月報』1927年1月号の付録（「大正天皇御不例御容態放送一覧」）には，時々刻々と変化する大正天皇の体温・脈拍・呼吸が仔細に（2時間置きに）グラフ化されているが，この微細な態度こそが，放送的であったと言えよう。

この御容態報道において必然的に主導権を握ったのが，日本放送協会のなかでも東京中央放送局であったことは言うまでもない。天皇の在所である東京の地理的な優位性を活かすことができたからである。報道の具体的な手順として，まず東京中央放送局が宮内省から電話を受け，それを大阪，名古屋に連絡し，ほぼ同時刻に放送してもらうという，中継局のような役割を担っていた。『調査月報』には，このときの東京中央放送局の役割が次のように記述されている。

「宮内省庶務課長白根松介氏と面接し，各新聞社へ先帝陛下御容態を発表すると同時に直

接電話を以て宮内省より東京中央放送局へ通告することを約せり。而して宮内省よりの報告は直ちに大阪，名古屋両中央放送局に通告し，各局同時間に放送すべきことを協定せり。依って東京中央放送局は御容態放送に就ては三都中央放送局の中継放送機関となりたり」[29]

大正天皇崩御を伝える矢部謙次郎

以後，日本放送協会では演芸放送，講演放送の自粛をしながら容態をほぼ同時的に伝えつづけたが，1926年12月25日午前1時25分，大正天皇は崩御する。同日午前2時54分，矢部謙次郎（放送部長）が崩御の一報を，翌々日の27日午前9時，岩原謙三（日本放送協会会長）が「奉悼の辞」をそれぞれ東京中央放送局より放送した。誕生したばかりの日本放送協会は，天皇の死という極めて国家的な出来事に直面したのである。

その後，東京中央放送局のみ御斂葬（ごれんそう）の儀の模様を1927年2月7日に放送した。このときの放送が東京中央放送局における初めての中継放送と言われ[30]，マイクロホンを青山御所西御門に据え付け，葬列の音を拾いながら中継が行なわれた。この斂葬の儀の模様は東京中央放送局のみの中継だったため，基本的に高価な真空式受信機をもつ一部の人びと以外，東京圏内に閉じた「同時性」空間であった[31]。しかし，この大正天皇の御斂葬の行列中継が，続く昭和天皇即位の大礼奉祝の行列中継へとその内容を変えたとき，ラジオによる「同時性」空間は本格的に東京から全国へと拡大していくことになる。放送は皇位の遷り変わりを起爆剤として，全国放送網の完成を急いでいくことになるのである。

(3) 昭和天皇即位―― 天皇の祝音

大正天皇の御容態放送時は東京から各局への電話連絡で，御斂葬放送時も東京だけに閉じた中継だったため，大正時代にはまだ厳密な意味での全国中継網は完成していなかった。そこで日本放送協会が全国放送網の完成の目標時点として定めたのが，1928年11月6日に行なわれる昭和天皇の即位行事であった。先帝が崩御してから約二年後に行なわれるこの「昭和の誕生」という国家的な祭祀に合わせ，日本放送協会では慌ただしく全国放送網の構築が進められていくことになる。

ラジオ放送網の全国敷設の原動力となったのが昭和天皇の即位行事（1928年）であり，戦後，テレビ放送網の全国敷設の原動力となったのも皇太子ご成婚パレード（1959年）であったことは，歴史的な類似として，記憶されておくべき史実であろう。放送史の記述の要所には必ず天皇が登場するように，日本における放送の歴史とは，東京に座を置く天皇の存在を抜きにしては語ることはできない。ここには天皇の祭祀と放送網の敷設を抱き合わせようとする，日本の放送による帝都主義的な発想が垣間見える。

1928年11月5日，全国六つの放送局を結んで全国中継放送網が完成した。この完成日は，昭和天皇即位の大礼奉祝の前日のことであった。このとき，東京，大阪，名古屋のほかに，広島，熊本，仙台，札幌，金沢に新局が建設され，大礼奉祝特別放送のために仙台から熊本までの六局を有線でつなぐ総延長約1,860キロメートルの中継線が開通した。まさに大礼奉祝の直前すぎるほど直前に，全国放送網の敷設が完成したのであった。

昭和天皇即位の鹵簿

全国放送網が完成した11月5日当日，逓信省電務局長の畠山敏行は，全国中継放送で次のように述べている。「今後に於きましては，是等の放送局で，或る一箇所から放送致しますると，同時に其他の放送局からも其儘同じことが放送されることになるのであります」[32]。そのうえで，畠山は「今やラヂオは中継同時放送の時代に入ったと言うことが出来る」とも述べている。ここにおいて，全国をめぐる「同時性」空間の原型が日本に誕生したのである。

では，即位の当日，その祝事のために東京を出発し京都へと向かう天皇・皇后を，放送局はどのように全国中継したのであろうか。

昭和天皇大礼奉祝の実況放送は1928年11月6日から27日まで，約三週間にわたって行なわれた。各放送史には同期間の番組編成が載っているのでその詳細については割愛するが，この天皇の京都行幸の模様を東京，大阪，名古屋が発信局となって全国中継した。まず，11月6日午前の宮城（皇居）ご出門から東京駅発車までを東京中央放送局が担当し，同日午後の名古屋駅到着と翌7日午前の発車を名古屋中央放送局が担当。7日午後の京都駅着車から京都皇宮到着と，10日以降の紫宸殿における即位礼を大阪放送局が担当し，20日の伊勢神宮ご参拝を名古屋放送局が担当。その後，大阪に戻り，最終的に27日に宮城帰還までを大阪，名古屋，東京の順で放送局が全国中継した[33]。宮城を始点と終点としながら，新天皇による全長約600メートルに及んだと言われる鹵簿（ろぼ）（近衛騎兵に警備された行列）の移動を，ラジオは「同時性」空間として演出しつづけたのであった[34]。

ここで重要であったのが，天皇が物理的に「移動」をしていたということであろう。長距離の移動を中継してつなぐということは，全国に放送網を敷設したがゆえに為せる業でもある。かつて明治天皇もまた東京を起点として全国を巡幸したが，それは道すがらに遭遇した民衆にしか見えない天皇の移動する身体であった。しかし，昭和初期における全国放送網の敷設によって，全国どこでも天皇の移動する身体を即時的に共有することができるようになった。すなわち，天皇が移動する国家的イベントを，ラジオによってどこにいても同時体験できるようになった。さらに，このとき，「東京から出て東京に帰る」という天皇の移動する身体が東京を拠点としていたことも重要で，ここにおいて全国に大都市・東京を基準に時間を秒単位で共有する空間体験が始まったのである[35]。

4．勃興するラジオの「同時性」論

(1) ラジオ・ジャーナリズム論

全国中継という新しいメディア体験の拡がりによって，1930年頃から「同時性」を論じるラジオ論が隆盛していくようになる。

書き手である多くの知識人たちは，ラジオを先行するメディア（とくに新聞）と比較しつつ，そこに「同時性」というラジオ特有の媒体特性を見いだして，新しいジャーナリズムの発生を論じようとした。1928年に全国放送網が完成し，急速にラジオの「同時性」空間が全国へと拡がりを見せるなかで，知識人たちのラジオ論もまた活性化していったのである[36]。

もっとも早い段階でラジオの「同時性」について論じたのは，室伏高信である。室伏は「ラヂオ文明の原理」(1925) と題する論考のなかで，「ラヂオ文明」の時代の到来を高らかに宣言し，この「ラヂオ文明」こそが近代文明の最高の発展過程であると主張した[37]。ここで室伏はラジオと新聞を比較しつつ，両者の差異は単なる「種類の相違」ではなく，「時間と空間とにおける能率の相違」であると規定した。

「新聞紙が明日伝えるところのものをラヂオは今日伝えるのである。新聞紙が一つの地方に伝えるところのものをラヂオは世界に伝えるのである」[38]

この室伏の論考はまだ東京放送局だった時代に書かれたものであったが，「ラジオにおける時間的及び空間的能率」というメディア論的な視角は，極めて先見の明があったと言えよう。後に今村太平が映画との比較のなかでラジオの特性を論じ，「ラジオの一番大きな特徴は，何よりもそれがつねに現在的だということにある」[39]と述べているが，これは室伏の枠組みの焼き直しにすぎない。

この室伏によるラジオの媒体特性に関する枠組みを，より学問的に昇華させたのが小山栄三であった。当時，東京大学新聞研究室に所属していた小山もまた，新聞との比較のなかでラジオの媒体特性を論じ，「時間の問題としての同時性―Synchronisation」および「空間の問題としての同所性―Synlocalisation」と指摘した。

「現今の科学で知らるる限り電波より速力の早いものはない。で，ラヂオより速い通信装置はあり得ない。現今の科学で知らるる限り電波より浸透力の強いものはない。で，ラヂオより広き拡散性を持つ通信装置はあり得ない。ラヂオは極度の時間・空間の短縮又は克服の最高度の文化的手段である」[40]

小山は，ラジオの世界を時間と空間が結合した「第四次元世界」とみなし，ラジオの媒体特性を九つの次元[41]へと分けていく。この小山による分類は，「同時性」というラジオの媒体特性を超えて発展させた，ラジオの機能論であったと言えよう。

こうして，室伏から小山へと展開した初期ラジオ論をまとめてみれば，ラジオのもつ「時間」と「空間」を無化する電波的作用について論じていく流れであったと言える。この流れをさらに展開させたのが，ラジオによる「音のジャーナリズム」の誕生に関する議論であった。つまり，「ラヂオ事業をジャーナリズムと見れば，現代これ以上に恐るべき強大なジャーナリズムは，あり得ないだろう」[42]とする思考への転換である。

例えば圓地與四松（よしまつ）は，これからのラジオ・ニュースは新聞記事の単なる複製ではなく，その媒体特性を活かしながら，事件を生のままで報道する放送独自のジャーナリズムを確立すべ

きであると訴えた。

「これまでのようなラヂオ・ニュースと新聞ニュースとが競争するもの乃至は相互扶助するものと云うような考えが間違いであって，すべからくラヂオ・ニュースの本質と限界に基く独自のイデオロギー――「耳のニュース」としての独自性――を確立せねばならぬと云うことだけは提唱して置きたい」[43)]

ただ，こうした新しいジャーナリズムの可能性が論じられていく一方で，ラジオ・ジャーナリズムの短所についても議論されるようになっていく。それは主に「受け手」側の難点として指摘された。

第一に，ラジオは聴取者との間に約束された時間内に聴かなければならないこと。第二に，装置のある場所でなければ聴くことができないこと。第三に，新聞のように自分の欲しい情報だけを得ることができないこと。第四に，ラジオは新聞ほど詳細に報道することができないこと，などであった[44)]。

したがってここまで見てきたように，当時のラジオ論は，ラジオを時間と空間を超越する強力な電波的特徴として論じる一方で，聴衆の側から見れば，時間的限定と空間的限定があるという逆説的な特徴も併せて語られた。この両義性に自覚的でありつつ，いかにすればラジオ・ジャーナリズムが生まれるのかという議論が，全国中継網が完成した1930年代以降，盛んに展開されるようになったのである。

(2) 東京集権論／地方周縁論

ラジオの機能論および新ジャーナリズム論を突きつめていくと，「都市」と「農村」の問題へとつながっていく。ラジオのもつ電波の広範性は聴取者を区別することなく，誰でも情報の受け手となることができるため，そこに都鄙文化の交錯が起こり，都市と農村の関係そのものが問い直されるようになった。

たしかに当初は受信機が高価であることによる聴取者の区別が行なわれていたのだが，しだいに全国に鉱石式受信機が普及するとその区別はなくなっていった。電波メディアである放送は，都鄙の区別を徐々に撤廃し，すべての文化的秘密を暴露するようになったのである。そして，ここで主に焦点化されたのが，ラジオのもたらす農村文化の変容であった。かつて後藤新平が述べた「文化の機会均等」が，ここで再び議論の俎上に載るようになったのである。

例えば仲木貞一は，「都会文化が地方人に消化されて，地方人を都会化して行くことになる筈である」とラジオの地方への順機能を論じ，「都会人と地方人とが，相互にラヂオを介して，其所に文化の交換が行われ，それによって，人生の内容を豊富にし，生活様式の改善進歩を計り得る事は，全くラヂオに感謝して然る可きだと，つくづく考える次第である」とラジオを礼賛している[45)]。

また那須皓も，ラジオによる農村文化生活の向上を次のように指摘している。

「空間的距離を無視し得るラヂオは広き地域に疎居散在せる農村民に対して特に適切なる機関であると云うことである。例えば，国家的重大事項の報道の如き都市に於いては新聞号外によって即刻之を知り得る便があるが遠隔せる地方に於いてはラヂオに依るの外はない。殊に交通甚だしく不便なる山間或は島嶼に於いては之が殆ど唯一のものと考えられる。居ながらにして中央に於ける名士の講演を耳にし，名人の音楽に耳傾け得るのもラヂオあればこそである」[46)]

農村文化を向上させるためには，ラジオをい

かにして農村に普及させるかも問題になってくる。実際，1932年3月末において，ラジオの全国加入者総数105万5,778のうち農業者は3万1,673で，その割合はまだ3％程度にすぎず，「ラヂオ文化が農業者に及んでいる程度の甚だ僅少なるを嘆かざるを得ない」[47]状況とされていた。

そこで那須は農村でラジオが普及しない要因を，受信機が高いこと，電力供給が高価なこと，聴取料が高いこと，放送時間が往々にして不適当であること，農村に適した内容の放送が比較的少ないことなどを挙げ，ラジオを農村に普及させるためには，放送の内容・形式・時間などを農村的なものとして組織化し，農村におけるラジオ聴取を低廉化して，聴取団体を組織化すべきであると主張した[48]。

文部省社会教育局もまた1930年と32年に農村娯楽に関する大規模な調査を行なっており，近代的な都市娯楽をいかにして農村へと広めるかは国策でもあったのである[49]。

しかし一方で，ラジオ論のなかには当初から，都市文化を農村へと押しつける「文化的同質性」に対する批判も根強くあった。例えば室伏高信はラジオの社会的使命は独裁性にあると述べ，「凡ての地方的なるものが滅びて中央集権が確立する。凡ての個人的なものが滅びて集団的なるものが凱歌をあげるのである」[50]と，ラジオによる支配階級の独占に早くから警鐘を鳴らしていた。

また石島治志は，ラジオによって資本主義化が進み，「都会社会における極端なる官能主義」と「農村社会の極端なる都会模倣」が起こっていることを指摘し[51]，そのうえで，文化はそれぞれのカラーを有するべきであるとして「地域的郷土文化」の復権を唱え，「文化的同質性」を抑制することの必要性を説いた[52]。ラジオのもつ広範で同時的な伝播力が，農村の瓦解への危機感として論じられ，しだいにその対策が議論されていくようになったのである。

このなかで，都市と農村という二項対立を超えて議論を展開していたのが，権田保之助である[53]。これまでの議論は，ラジオをめぐって都市と農村は対立するものであるという無意識な前提に基づいていたが，権田は，とくに慰安放送においては「都会と地方との差別を特に顧慮せねばならぬ何等の理由を発見し得ないのである」[54]と述べている。

権田がこのように考えるのは，演劇にせよ，音楽にせよ，それらを提供するものは大部分が都会的であって，どうしても「都会本位」や「都会生活中心」の放送となることは止むを得ないと考えるからであった。一方で，地方聴取者もまた，そもそも「都会娯楽讃仰的」で，彼らが求めているのは地方的娯楽ではなく，むしろ都会的な新興娯楽であった。

ゆえに権田は，地方文化を局地的に育成していくことそのものを否定し，むしろラジオを「民衆娯楽」とみなすことで，都鄙という二項対立を超えて「ラヂオに即したる新しき民衆娯楽の創成」[55]を夢見ることになっていくのであった。

以上に見てきたように，全国放送網の完成に伴ない，ラジオの「同時性」論は新しいジャーナリズム論，都鄙文化論，そして民衆娯楽論へと接続していった。1930年代を中心にここまでラジオ論が隆盛したのは，その論調が礼賛であれ忌避であれ，ラジオが全国的な拡がりを見せるなかで，多くの知識人たちがラジオによる「近代化」への意識を共有していたからであろう。当時，鶴見祐輔が「近代精神は，ラヂオによって先鋭化する」[56]と述べたり，小山栄三が

「電波の波動は近代人の生命の躍動（エランヴィタール）だ」[57]と述べていることがその証左である。より早く，より広くを希求する昭和初期の近代人たちの欲望が，放送空間だけでなく，ラジオの言論空間もまた拡げていったのである。

しかし，新しいジャーナリズム論にせよ，都鄙文化論にせよ，当時のラジオ論は，その背景にあった天皇の存在には一切触れていない。それはラジオ論を語る知識人たちが，現人神である天皇と放送との関連に言及することを避けていたこともあるだろう。あくまで当時のラジオ論は，ラジオの近代性そのものに焦点が絞られ，それを支える天皇への視線は欠如していたのである。

5. “幻”の東京オリンピック放送——「同時性」のナショナリズム

1928年の昭和天皇即位行事をきっかけに，全国放送網が完成して以後，ラジオによる「同時性」空間は東京から全国へとさらに勢いを増して拡大し，次々と放送局が新設されていくことになる。例えば，福岡，岡山，長野，静岡，京都などにも新局が建設され，1934年5月には全国に25局の放送局が誕生することになった。知識人たちによって「文化的同質性」の懸念が語られながらも，為政者たちによるラジオの「同時性」空間の拡大への欲望は，尽きることはなかったのである。

こうしたラジオの「同時性」空間のさらなる拡大のための起爆剤となっていったのが，近代オリンピックであった。1896年に誕生した近代オリンピックは，アマチュア・スポーツの祭典という創設者クーベルタンの理念が後景化し，しだいに自国民を鼓舞し，諸外国へPRするための装置となっていった。ここで放送が生みだす「同時性」空間は，一気に世界規模へと展開していくことになる。すなわち，近代オリンピックを契機として，ラジオの「同時性」空間は，日本から世界規模へと拡大していくことになったのである。

オリンピック・ロサンゼルス大会の放送を聴く人びと

日本における初めてのオリンピック放送は，第10回ロサンゼルス大会（1932年）であった。日本初のオリンピック放送のために日本放送協会からは三名のアナウンサーが派遣され，アメリカから海外へ放送するのは日本だけという熱の入れようであった。しかし，ここでの放送は，アナウンサーが競技場で観戦してきた模様をメモにまとめ，後刻にスタジオから実況しているかのように見せる「実感放送」と呼ばれるものにすぎず[58]，同時的な中継放送は実現していない[59]。

日本のオリンピック放送は，次の第11回ベルリン大会（1936年）でさらなる発展を遂げる。二名のアナウンサーが派遣され，ここで初めてオリンピックの実況中継が実現したのである。競技の模様は毎日，午前6時から7時までの「録音放送」と，午後11時から12時までの「実況中継」で伝えられ，とくに実況中継は人気を博した。

なかでも今日まで語り継がれているのは，女子200メートル平泳ぎの決勝中継であろう。22歳の前畑秀子がマルタ・ゲネンゲルと接戦を演じた模様を，アナウンサーの河西三省が「前畑ガンバレ！」と連呼しながら実況で伝えた。このときの放送を，翌日の新聞は次のように書いている。

「たうとう勝った。前畑嬢が優勝したのだ。その一瞬の放送こそ，正にあらゆる日本人の息を止めるかと思はれるほどの殺人的放送だった。……マイクに齧りついた“日本人河西”は，遠く九千粁の空を隔てて日本中の心臓をかき廻して了った」[60]

人びとはなぜ9,000キロも離れた異国の地からの実況に熱狂できたのか。それは現地と結ばれた共時体験があったからにほかならない。当時，ある聴取者は次のように書き記している。「『録音放送』には，しかしながら，やっぱりすこし箸を下ろし渋るところがあります。行われている競技を同時に観ているという意識が，主要な心理的要素であることが解ります」[61]。

この投書は，録音放送と比較して，実況放送の心理的高揚について触れたものであるが，これはまさに，放送の「同時性」への欲望ではなかったか。人びとは河西の感情的な応援を，同時的に受け入れることにこそ聴取の快楽を覚えはじめたのである。こうして放送が生みだす「同時性」が近代オリンピックと結びつくことで，新たなナショナリズムが喚起されていく。これは「同時性のナショナリズム」とでも呼ぶべき現象であった。

第11回ベルリン大会は，日本にとって二つの点で重要な意味をもっていた。第一に，ベルリン大会の開催直前の7月31日に，次回の第12回開催地（1940年）が東京に決定されたことである。この決定のニュースは，すぐに現地からの中継放送で伝えられた。ベルリン大会でナチスドイツが大規模な宣伝運営を行なったことを参考に，次の東京大会でも紀元2600年の奉祝を名目として，帝都の繁栄を世界にいかに演出していくかに焦点が当てられていく[62]。

第二に，ラジオの「同時性」空間が，テレビの「同時性」空間へと移行しはじめたことである。ベルリン大会では世界で初めて大会期間中に市内28か所でテレビジョン受像機が設置された[63]。東京大会ではこのベルリン大会でのテレビ放送の成功をいかに引き継ぎ，発展させるのかが課題となっていくのである。

そのために日本放送協会では，ベルリン大会をさらに上回るテレビ放送を実現させ，日本の放送技術の水準を世界に誇示することを目標に掲げていくことになる。ベルリン大会で用いられたテレビはあくまで「機械式」で走査線も180本にすぎなかったため，続く東京大会ではこれを「全電子式」に切り替える計画を練った。ここで白羽の矢が立ったのが，日本のテレビの父，高柳健次郎である。

日本放送協会では，開催決定の直後に，高柳を日本放送協会技術研究所のテレビジョン部長に招聘すべく動きだしている。しかし，これに難色を示したのが高柳が所属する浜松高等工業学校で，日本のテレビ技術研究を牽引した人物を易々と手離すわけにはいかなかった。一方で，高柳もこれまで日本放送協会が研究費を捻出してくれた義理も無視できず，結局，高柳は浜松高工の教授職についたまま，日本放送協会の第三部長となる異例の人事となった。逆に言えば，それほどまでに日本放送協会は東京オリンピックに向けたテレビジョン開発に焦り，そして，高柳頼みだったと言わざるを得ない。

東京大會にはレテイヴ實現

指導に高柳教授

研究所入り決定

三すくみの縺れが解消して

待望の實用化へ一歩

ヒゲタ醤油

高柳の研究所入りを伝える新聞[64)]

当時，高柳は東京オリンピックのテレビ放送実現に向けて強い自信を覗かせている。

「日本のテレヴィジョンも既に基礎時代は過ぎ今後は各種の研究を総合して次の東京オリムピックには国内のみならず世界各国への放送をもやる覚悟を持たねばなりません。映像の鮮明さにおいてはドイツを遥か凌いでいますから日本内地ならば自信があります。今度のオリムピックのころにはテレヴィジョンのないラヂオなんて凡そ意味のない時代になるのじゃないかと思います」[65)]

1937年9月には，逓信省が中心となって「テレビジョン調査委員会」が設置され，1938年2月25日，オリンピックでのテレビジョン標準方式が「走査線441本，毎秒像数25」に決定された。これはベルリン大会時よりも，倍以上の精細度であった。

興味深いのは，このときすでに日本放送協会による「五輪放送計画」がほぼ固まっていたことである。「本放送施設大綱（案）」は二項目を主要眼目として標榜し，(a) 鮮明な像を見易く観覧させること，(b) 像を遠方の地まで伝達することとして，そのために，テレビジョン放送局を東京，大阪，名古屋の三大都市に設け，公衆受像所を各地に約90か所完備することを予定していた[66)]。また，テレビジョン放送所建設の候補地として愛宕山も検討されていた。1940年の開催に向けて，ラジオだけでなく，テレビによる「同時性」空間を創りだす青写真がここまで完成していたのである。

しかし，1938年7月15日，第12回東京大会は幻となる。戦時中の物資統制下における競技場建設のための鉄材確保ができなくなったことを理由に，大会の返上が閣議決定されたのである。この返上の知らせは，高柳をはじめとするテレビ技術者たちを落胆させたことは想像に難くない。高柳の遠視（テレビジョン）の夢とともに，放送による戦前最大の「同時性」空間も夢と消えたのである。

もし1940年に東京オリンピックが実現していたならば，帝都を中心とした放送の「同時性」空間の到達点となったであろう。大正天皇の御斂葬の儀から始まり，昭和天皇の即位大礼奉祝，そして紀元2600年祝賀の東京オリンピックへと至る流れは，すべて放送によって帝都が特権的な中心へと押しあげられていく国家的なイベントであった。放送は「同時性」空間の拡大のために帝都での祭祀を利用し，一方で，帝都もまた放送によって日本の中心地として演出される舞台という特権的な地位を活かし，自己の意識を広めていった。ここに放送と帝都という一貫したウロボロス的な関係を見いだすことができるのである。

6．おわりに――「同時性」空間の帰結

以上，日本におけるラジオの「同時性」空間の変遷を辿ってきた。1925年に放送を開始し

て以後，放送による「同時性」空間は，①東京→②全国→③世界という見事なまでの拡大図を示していった。その一方で，ラジオ的同時性からテレビ的同時性というもう一つの軸への発展も遂げた。本稿で補助線として設定したように，そこには東京および天皇を起爆剤として展開していった放送による「同時性」空間の拡がりの変遷を見ることができるのである。

すでに本稿で見てきたように，放送の「同時性」空間は東京オリンピックの実現で到達点となるはずであった。しかし，放送はオリンピックという祭典よりも，むしろ，戦争と同期していく悲しい結末を辿ることになる。戦況を伝える臨時ニュース，東条英機首相による詔書捧読，あるいは空襲警報など，放送の速報性や広範性は国民の戦意昂揚や行動統一のための道具として積極的に利用されていく。放送は分散していた情報宣伝活動を一本化し，あらゆる人びとを一つの物事へと集中させていったという意味において，戦争に加担した戦犯であった。

かつてラジオの特性を的確に分類していた小山栄三も「今やラジオは戦争遂行のための最強の而も最重要な装置と考えられるに至った」[67]と結論づけるに至ってしまう。とくに1940年以降，ラジオ論も戦時下における放送の重要性を説くものが増えはじめ，明らかな論調の変容を迎えていく。

長谷川如是閑が，ラジオの発達とは「統制時代を作り上げる動力」[68]であると主張しつづけたように，政府の管理下に置かれて中央集権的な傾向が強かった日本の放送は，ある意味で必然的に，戦争への同期という帰結となったのである。

この戦争を「同時性」空間によって終わらせたのが，天皇であった。1945年8月15日正午，天皇は初めて正式に，ラジオの前で国民に語りかける。それまで天皇の「玉音」を放送することは禁忌とされていたが，このとき「玉音」が戦争の終結を告げるために利用された。これはラジオの同時性による「降伏の儀式」[69]でもあった。

人びとは天皇の難解な言葉と雑音まじりの放送のせいで意味が分からず，むしろその後に放送員によって朗読された「終戦の詔書」によって事態を理解した。皇居・二重橋前では玉音放送を聴いた人びとが咽び泣き，跪いた。廃墟化した東京から玉音放送が流れ，人びとが敗戦を共時的に理解したとき，戦前における放送の「同時性」空間は完成をし，そして，その終焉を見たのである。

放送と天皇，あるいは放送と帝都との関係は，いまだ多くの議論の余地を残している。かつて山陽道巡幸（明治18年）を最後に天皇の姿は不可視化され，「御真影（ごしんえい）」の礼拝儀礼が天皇の視覚化のための重要な政治的装置となった[70]。しかし，大正末期に誕生したラジオは，電波を通して天皇のイメージを再び顕在化させていく。この新たな天皇の可視化は，戦後のテレビジョンによって一層顕著なものになっていく――。

放送と天皇，そして帝都の三者が，どのような関係を保ちつつ，いかにして近代日本という国民国家を作りあげていったのかを明らかにすることは，明らかに本稿の範囲を超えている。そのためには，戦前と戦後の連続性と非連続性についてのさらなる検証が必要であろう。今後の課題としたい。本稿は，そのための準備として，帝都を補助線とした新たなラジオ・メディア史研究のためのささやかな試みであった。

（まつやま ひであき）

注：

1）社団法人日本放送協会編（1931）『昭和六年ラヂオ年鑑』，p.133
2）社団法人日本放送協会編（1932）『昭和七年ラヂオ年鑑』，p.158
3）加藤秀俊（1976）「交通・通信網の発達――世界における同時性」『思想』624 号
4）藤竹暁（1968）『現代マス・コミュニケーションの理論』日本放送出版協会
5）竹山昭子（2002）『ラジオの時代――ラジオは茶の間の主役だった』世界思想社
6）McLuhan, Marshall（1962）The Gutenberg Galaxy: The Making of Typographic Man, Toronto: University of Toronto Press.（＝森常治訳（1986）『グーテンベルクの銀河系――活字人間の形成』みすず書房）
7）長谷川如是閑（1935）「慰安放送の指導性と大衆性」『放送』第 5 巻第 10 号
8）度々指摘されるように，ラジオに関するメディア史研究は，「活字資料中心」の議論となってしまう限界がある。いわばラジオ論（活字）からラジオ・メディア（音）への接近である。これは番組音源などの第一次資料への接近不可能性が最大の要因であるが，本稿もまたこの限界を孕んでいることを指摘しておきたい。なお，本稿の引用部では基本的に原典のまま旧字体を用いているが，一部，常用漢字に改め，ルビをふった。
9）東京都（1972）『東京百年史　第四巻』，p.1102
10）社団法人日本放送協会（1939）『日本放送協会史』日本放送出版協会，p.6
11）長岡半太郎（1949）「放送開始前後のエピソード」『放送文化』8 月号，p.26
12）越澤明（2011）『後藤新平――大震災と帝都復興』筑摩書房
13）『東京朝日新聞』1925 年 3 月 23 日朝刊
14）越野宗太郎編（1928）『東京放送局沿革史』（非売品），pp.123-124
15）竹山昭子，前掲書，pp.26-33
16）越野宗太郎編，前掲書，p.35
17）安藤更生（1931）『銀座細見』春陽堂
18）『東京朝日新聞』1925 年 6 月 7 日夕刊
19）今和次郎編纂（2001）『新版大東京案内　上』筑摩書房，p.173
20）今和次郎編纂，前掲書，p.320
21）日本放送協会編（1977b）『放送五〇年史　資料編』，pp.422-423
22）当時，東京市民にとってラジオの「同時性」空間を意識したものの一つが，「時報」であろう。秒単位で時間を共有する「時報」は，人びとの時間感覚を同期させる契機となった。「時報」は鉄道とは異なる形で，同質の時間を共有する「近代」の始まりと見ることもできる。
23）『調査時報』1926 年 1 月 20 日号より作成。ここで言う聴取者数とは，聴取契約者数のことである。
24）越野宗太郎編，前掲書，p.104（傍点引用者）
25）日本放送協会編（1977a）『放送五十年史』，p.42
26）日本放送協会編（1951）『日本放送史』，p.148
27）日本放送協会関西支部（1934）『大阪放送局沿革史』，p.147
28）社団法人日本放送協会（1939）『日本放送協会史』日本放送出版協会，p.19
29）「先帝陛下御不例に就いて東京中央放送局の活動」『調査月報』1927 年 1 月号，p.7
30）仲木貞一（1928）「東京中央放送局に於ける中継放送の回顧」『調査月報』第 1 巻第 1 号
31）この斂葬の儀の中継を高性能受信機で聴くことのできた東京以外の地域から，東京中央放送局に感謝状が届いたという。例えば新潟県からは「当日弊家に祭壇を設け村人を集め，遙拝御通夜申上候」と言われたり，山形県からは「東北の辺鄙の片田舎で恰も都にて拝列したると同様，まざまざその御有様が目に見えるようで『哀の極』の哀曲に初まり，ニュースに終る其間聴取者の咳一つなく謹聴致しました」と言われた（「御大葬当夜各地放送聴取状況」『調査時報』1927 年 2 月号）。これはラジオによる全国規模の「同時性」空間誕生の萌芽でもあった。
32）畠山敏行（1928）「中継放送とラヂオの効用」『調査月報』第 1 巻第 8 号，p.1
33）日本放送協会放送史編修室（1965）『日本放送史　上巻』，pp.235-6，日本放送協会編（1977b），前掲書，p.281
34）1977 年 1 月 13 日放送の NHK 特集『昭和の誕生』（演出：相田洋）には，参謀本部陸地測量部が撮影した当時の即位行事の鹵簿の映像が収められている。
35）東京を基準にした「同時性」空間の誕生をめぐる典型的な例として，「ラジオ体操」が挙げられるだろう。1928 年 11 月 1 日に東京中央放送局で放送を開始した「ラジオ体操」は，その後，1929 年 2 月 12 日に全国中継されるようになり，全国化していった。なお，1929 年 4 月には全国放送部長会議が東京で開かれ，番組の入中継についての議論が全国の放送局でされるようになっていった。
36）1920 ～ 30 年代のラジオ論をまとめた研究としてはすでに以下の論考がある。後藤和彦（1963）「日本における放送研究の展開――放送開始時から日中戦争まで」『NHK 放送文化研究所年報』第 8 号，津金澤聰廣（1998）『現代日本メディア史の研究』ミネルヴァ書房

37）室伏高信（1925）「ラヂオ文明の原理」『改造』第7巻第7号
38）室伏高信，前掲論文，p.34
39）今村太平（1943）「放送綜合演出論」『放送研究』第3巻第10号，p.18
40）小山栄三（1932）「ラヂオの特異性と社会的機能（一）――其の第四次元性に就て」『調査時報』第2巻第6号，p.4
41）①電波による音響の機械的再生，②同時性（又は瞬速性），③公開性（誰でも聞きうること），④普遍性（又は散布性），⑤定期性（定期的放送），⑥多様性，⑦関心の一般性，⑧現実性，⑨放送の官営または企業化，である。
42）龍膽寺雄（1933）「放送プログラムの飛躍性（一）――そのヂャーナリスティック批判」『調査時報』第3巻第9号，p.11
43）圓地與四松（1932）「ラヂオニュースの本質と限界」『調査時報』第2巻第1号，p.8
44）矢部謙次郎（1931）「ヂャーナリズムとラヂオ（二）」『調査時報』第1巻第15号，p.9
45）仲木貞一（1932）「ラヂオによる都鄙文化の交錯に就て」『調査時報』第2巻第10号，p.12
46）那須皓（1934）「農村文化とラヂオ」『放送』第4巻第13巻，p.5
47）岡村精次（1934）「農業者とラヂオ聴取の問題」『放送』第4巻第13巻，p.20
48）那須皓，前掲論文
49）水谷徳男（1933）「新しき農村娯楽の建設（一）」『調査時報』第3巻第8号
50）室伏高信，前掲論文，p.44
51）石島治志（1932）「ラヂオ社会学私稿　2」『調査時報』第2巻第4号
52）石島治志（1932）「ラヂオ社会学私稿　3」『調査時報』第2巻第6号
53）権田の特異なラジオ論については，以下でも触れられている。吉見俊哉（1995）『「声」の資本主義――電話・ラジオ・蓄音機の社会史』講談社
54）権田保之助（1936）「慰安放送の都会性と地方性」『放送』第6巻第10号，p.17
55）権田保之助（1932）「ラヂオと民衆娯楽」『調査時報』第2巻第1号，p.9
56）鶴見祐輔（1934）「ラヂオと近代精神」『放送』第4巻第10巻，p.10
57）小山栄三，前掲論文，p.4
58）橋本一夫（1992）『日本スポーツ放送史』大修館書店
59）山口誠は，第10回ロサンゼルス大会等を例に，新聞と放送による時差的な受容体験によって，オーディエンス間で共有される「社会的同時性」が創られたと論じている（山口誠（2008）「メディアが創る時間――新聞と放送の参照関係と時間意識に関するメディア史的考察」『マス・コミュニケーション研究』第73号）。
60）『読売新聞』1936年8月12日朝刊
61）中野局失名氏（1936）「オリムピックを聴いて……」『放送』第6巻第9号，p.57
62）第12回オリンピック大会に向けた招致は，1932年，東京市長の永田秀次郎が紀元2600年奉祝のために企画したことから始まった。西暦1940年は，神武天皇の即位である紀元前660年を建国元年とする紀年法で「紀元2600年」とされ，この祝賀とオリンピック招致を重ねたのである。
63）日本放送協会編（1977a），前掲書，p.108
64）『読売新聞』1937年4月29日夕刊
65）『東京日日新聞』1936年8月19日朝刊
66）テレビジョン技術史編集委員会編（1971）『テレビジョン技術史』社団法人テレビジョン学会，p.142
67）小山栄三（1942）「現代戦に於ける放送の性格」『放送研究』第2巻第1号，p.5
68）長谷川如是閑（1935）「ラヂオと統制時代」『中央公論』第50巻第9号，p.199
69）竹山昭子（1998）『玉音放送』晩聲社，p.71
70）多木浩二（1988）『天皇の肖像』岩波書店